

「舞楽面陵王」 ～ 舞楽面の特別講座 ～

日本仮面文化研究所 所長 梁取弘美 著

2013年10月1日

目次

はじめに

- [1] 舞楽面陵王が「特別なものである」という事情
- [2] 日本の仮面文化全体をみる。仮面年表の説明
(日本の仮面文化の歴史を見ておこう)
- [3]-1 舞楽面陵王の分類を説明しましょう
- 2 舞楽面陵王には明瞭な分類があります。
 - 1、朝廷型舞楽面陵王の特徴
 - 2、藤原型舞楽面陵王の特徴、
 - 3、平家型舞楽面陵王の特徴、
 - 4、源氏型舞楽面陵王の特徴、
 - 5、徳川型舞楽面陵王の特徴、
- [4] 形だけまねればいいよ ということではない、という話
- [5] 後編
- [5]-1 陵王面といわれる歴史遺品の品質でみたランキング
- [6] 舞楽面陵王として必要な品位と品質
- [7] 初代の舞楽面陵王を手本として学ぶ
- [8] まとめ
- [9] 舞楽面陵王の歴史遺品のランキング
- [10] 日本の仮面文化年表

はじめに

雅楽・舞楽が公演されることが多くなり、ファンが増えてきているように言われますが、そういう今だからこそ気をつけなければならないことがあります。それは本物の雅楽・舞楽というものへの回帰が不可欠ではなからうかということです。と言ってもピンとこないかもしれませんが、次のような表現ならどうでしょうか？即ち皆様が習得し、公衆の面前で公表する雅楽、舞楽よりずっとレベルの高いところに本物の雅楽・舞楽があって、皆様をあざ笑っているとしたら恐ろしいですね。そういう事に少し気付いていただく必要が感じられるのです。

今、普通の人々が雅楽・舞楽を習得することに大変な努力をし、苦勞をしてきた一方では、聞きかじった情報を頭に詰め込んだだけで批判をする側に立つ観客が居るわけです。おそらく本物の雅楽・舞楽というものを何らかの機会に知ってしまって、それを鏡として皆様が奏する雅楽・舞楽を冷ややかに批判するということがあり得るわけです。子供の学芸会とは違うわけだけれど、高貴な文化の継承という場面なわけです。雅楽の演奏や舞楽の装束や、舞振りまではなかなか批判を受けにくいものですが、舞楽面については批判を受けやすいのです。

舞楽面は余りに目立つものですし、本来的に舞楽の中核をなすものですから、これの品位、品質

の上下の差が目立ちます。そのことに気付かないのは意外と、使う人たちなのかも知れません。

日本に限って仮面文化というものがある、仮面があってこそその演舞と言えるものが舞楽と能楽という高尚なものになっています。その高尚さを支えるのが、各仮面であるという事を改めて認識していただきたいと思います。粗末な仮面を使ったのでは舞楽というものに泥を塗る事になってしまいます。本物から外れた形のものや、ペンキ塗りたてのような仮面を平気で使うのでは、高尚な雅楽・舞楽では無いわけです。

従来は本物の舞楽面に関する情報が整理されていなかったので、本物にたどり着くことが困難だったかも知れませんが、次のキーポイントを頭に入れておけば容易に本物にたどり着けるのです。そのキーポイントとは皆様がわりと身近に感じて参加していると思われる雅楽・舞楽が元はといえば千数百年前に天皇の勅命のもとで朝廷の総力をあげて確立された非常に高貴なものです。そうゆう高貴なものであるが故に上品にして上質であるというのがキーポイントです。

千数百年前の奈良時代では朝廷の力とはとんでもなく強大であったわけで、この雅楽・舞楽を確立した聖武天皇は藤原光明子を皇后としてタッグを組んだ形で奈良の大仏を造営するなど非常に強い力を発揮した天皇です。その聖武天皇の勅命のもとに、初代の舞楽面陵王が創作されたことが判明しています。

その後 平安時代に雅楽・舞楽の全盛期となるものの、平安時代末には朝廷の力の低下と武家勢力の台頭によって雅楽・舞楽の継承が危ぶまれたものの、かろうじて守られたという状況下で本物の雅楽・舞楽より格段に品位、品質が低下していったことが見うけられます。

このように見てきますと、本物の雅楽・舞楽と呼べるのは、平安時代までのものということになります。

では具体的に本物の雅楽・舞楽をどうやって知ることができるのかというと、幸いにして初代の舞楽面陵王が現存することが判明し、その製作技術を解析することによって、当時の雅楽・舞楽に対する思い入れも判読できる状況にありますから、この初代の舞楽面陵王を通して、本物の雅楽・舞楽を知ることが出来るでしょう。

現在 雅楽・舞楽に関わる方々にもう少し舞楽面に正しい知識、関心を持っていただかなければならないと感じざるをえない情報がわりとしばしば耳目に入ってきます。先に申し上げたように、雅楽・舞楽はこの上なく高尚なものですから、それに関わることのプライドは相当に高くあるべきものだと思うのですが、私の手もとに入る情報では、現代の雅楽・舞楽に関わる全ての団体の舞楽面が、何らかの欠点を持ち本物の舞楽面よりずっと品質が劣るものであることがわかっています。そういう仮面が公衆の面前で使用されていることに憤りさえ覚える状況にあります。

せっかく高尚な文化を継承する立場にも関わらず不勉強や思い上がりもあろうとも思われる程、観客の目を軽視したものを公衆の面前で使用しているように見られます。言わば、粗悪品と言えるものを平気で納入する業者にも困ったものですが、何の違和感も感じていないように、使用する側にも困ったものと言わざるをえません。皆様が粗悪品を使い続けることで、そういうものを公認する形になるわけですから、やがてはこの世界が粗悪品に埋め尽くされてしまいます。いやすでに埋め尽くされているではありませんか。

形状の変化や品質の低下をそれも文化の変遷であると、平気で言う無知な人間もいるかも知れませんが、そういう何でもありのルーズな考えでは雅楽・舞楽の継承はありえないでしょう。大切なものがぐずぐずに崩れてしまっただけでは雅楽・舞楽ではないものとなります。厳格に本物を継承してこそ、本来の価値があるのではないのでしょうか。

目立つ粗悪品は舞楽面陵王に限らず沢山あります。例えば、綾切の面として下手な能面の小面

と同じ構造と彩色のものが使われているのではないですか。何を根拠にそういう外れた仮面を使うのでしょうか？本来、綾切は菩薩を表わしていますから、女性を表す小面とは全く異なるわけで、しかも菩薩が歯を見せて薄笑いをしていたらこわいですね。綾切では、高潔な閉じた口と仏像が見下ろしているのと同じ半月状の瞳孔であるのが本来の形です。安易に能面小面まがいの仮面を舞楽と名乗る舞台で使用することは禁じるべきでしょうし何より使う人たちが恥じなければなりません。

さて話は舞楽面陵王に戻しまして製作技術を詳しく解析したところでは、本物の舞楽面陵王の製作技術レベルは非常に高いので、それと同等の品質のものを作れとなると皆様が利用してきた業者ではとても無理でしょう。たとえやるとしても皆様が所有している陵王面の何倍かの代金を要求されるでしょう。・・・でもそれなら前のものの代金を返してもらいたいものですね。いずれにしても、粗悪品を使い続けられたのでは困りますから、何とかしなくてはなりません。

一つの思い切った手段として、日本仮面文化研究所で本物の舞楽面陵王と同等の品質の新面を作り、陵王面を使う全ての雅楽団体に無償で使ってもらおうという方法を考えています。充分に実現可能ですから、各団体から使いたい型を申し入れてもらうのが、まず第一歩となります。

もう一つの、もう少し穏やかな手段として、皆様の認識レベルを今後の学習で向上していただいて、徐々に本物の優れた舞楽面陵王に切り替えていただく方法もあるわけです。その為には学習資料が必要ですから、この特別講座を企画しました。またこの方法の場合は新たに本物の優れた舞楽面陵王に買い換えてもらうわけですから、製作技能者を、まず養成しなければなりません。

[1] 舞楽面陵王が「特別なものである」という事情

雅楽の歴史は 1300 年以上も昔に、朝廷が特別に上質な舞楽面陵王を創作したことが始まりとも言えます。紀元 701 年（大宝元年）に朝廷は大宝律令という日本初の官僚制度をスタートさせましたが、それによって政治手段の一つとして設置された式楽専門部署である雅楽寮が活動することになります。雅楽寮では、国内外の楽や舞を式楽にふさわしく編集して日本独自の雅楽・舞楽を組み上げるという仕事も行うこととなりますが、それには大変な苦労があったようで、日本の雅楽・舞楽が確立するまでにはかなりの年数がかかりました。スタートから 34 年も経った紀元 735 年に遣唐使の吉備真備が、唐楽の楽書要録と銅律管をもたらしたことで、にわかに蘭陵王が本格的に日本の雅楽・舞楽に組み込まれました。このことから分かりますように蘭陵王というものが、長年待っていた主役であったということを意味しています。

この蘭陵王の組みこみに大きく関わったと思われるのが、皇位継承から 10 年になる聖武天皇です。紀元 724 年（神亀 3 年）に 24 才になって皇位を継承した聖武天皇は、紀元 701 年に生れたとも言える雅楽寮とほぼ同じ年ということですから、父君の文武天皇がスタートさせた雅楽寮と共に成長されたと言えるわけで、雅楽・舞楽との縁が深かったということではないでしょうか。

そのため聖武天皇が、雅楽寮の活動に熱心に心をかけられたことがうかがわれ、このことがまず第 1 に、舞楽面陵王が“特別なもの”となった要因であろうと思われます。そして、もう一つの要因は、文武天皇の代から活動を始めた陰陽寮の関与が考えられる、舞楽面陵王を竜王とみな

した竜神信仰であったと思われます。それに加え、竜という語そのものが天子・天皇の物件に関する語であったため舞楽面陵王に竜そのものを重ねて特別なものとして取扱うことが、朝廷内の雰囲気になったと推察されます。これら二つの要因を背景として、朝廷の式楽用の初代の舞楽面陵王が、特別に上質な超高級品として誕生することになったと思われます。

そうした舞楽面陵王フィーバーがさめやらない紀元 752 年に大仏開眼供養会を行うことになったわけです。これはあくまでも仏教行事ですから宮廷雅楽・舞楽をそのまま適用するわけにはいかないけれども、天皇、皇后の威信のもとに行う行事なのだから格調の高い雅楽・舞楽をメインとして行いたいとして、仏教行事専用の雅楽・舞楽と舞楽面陵王とを新たに創作したと推察されます。そういうわけで、二つの特別に優れた舞楽面陵王が聖武天皇の時代に天皇の手もとで出来上がりました。そしてこの特別なものを核として日本の雅楽・舞楽が歴史を刻むこととなります。以上が、当研究所で調査した舞楽面陵王だけが特別なものであるという事情です。

ここで関連する重要なことを説明しておきましょう。これら舞楽面陵王の初代のものが出来た時代はというと、朝廷の式楽用のものは、紀元 735 年に遣唐使の吉備真備が唐楽の楽書要録をもたらしたすぐ後であろうし、又仏教行事専用のものは、大仏開眼供養会の行われた紀元 752 年のすぐ前であろうと推察されます。その時代背景をみると天平時代後期です。天平後期と言えば、仏教美術が円熟し高度な写実彫刻の技術が完成された時代と重なります。従って初代の式楽用の舞楽面陵王も、初代の仏教行事専用の舞楽面陵王も、いずれもきわめて写実性に優れた作品に仕上がっていたということが推察されます。

このように片や式楽用の初代の舞楽面陵王は宮中という上流階級にその魅力を知らしめることになり、片や仏教行事専用の舞楽面陵王は東大寺大仏開眼供養会という国をあげての大イベントで一般庶民にも見る機会を与えて、その魅力を知らしめることになったわけです。そのせいで舞楽面陵王は爆発的に人気が出たと見られます。とは言っても、何しろ天上人がやったことだったわけですから、一般人は遠目に見ることさえもやっとなんていうことで、そのイメージはどうだったのでしょうか。

時代がずっと下がって、朝廷の力の低下と武家勢力の台頭の時代になると、きわ立った武将が、朝廷をまねて、雅楽・舞楽の組織を作って行うようになり、その為の舞楽面陵王を独自の創作で作りあげたのです。それらの舞楽面陵王は、権力にものをいわせて力のかぎり優秀なものへと作りあげられました。平清盛、源頼朝、徳川家康が、それぞれ独特の舞楽面陵王を創作したというこだわりの事実が分かったのです。このようなことから舞楽面陵王がいかに特別なものであったかがわかんと思います。

このように“特別なもの”としての本物の舞楽面陵王が厳然と存在する一方で、本物とはとても言えない異様なものが歴史遺品の中にはたくさん存在するという事実がありますから、それらを見る機会があった場合には、きっちりと異様なものを見分ける力を身に付けておく必要があります。

歴史遺品は、色々な形で影響してくる場合がありますから、それにまどわされないためには、正しい知識を身に付けておくことが必要ということです。朝廷の式楽用の初代の舞楽面陵王は、その後宮中で写し継ぎの形で厳格に継承され現在の宮内庁式部職楽部で使用のものへと受継がれています。仏教行事専用として創作された初代の舞楽面陵王は写し継がれていません。東大寺の火災や戦火をのがれてのことか、又は光明皇后の命令によるものか、東大寺からは遠く離れた静岡県の鉄舟寺に現存することが分かりました。その事実を紀元 1259 年(正元元年)時点で東大

寺も朝廷も知らなかったようで、正元元年銘で復刻された陵王面は、情報不足からと思われる多少異なったものとなっています。

雅楽・舞楽がこの特別なもの、即ち非常に上質な舞楽面陵王を柱として上品で格調高いものとして成立しているという事を心にとめておく必要があると思います。

[2] 日本の仮面文化全体をみる。仮面年表の説明

(日本の仮面文化の歴史を見ておこう)

日本に限って特殊な展開をする仮面文化の歴史も知っておく必要があります。ここで取上げる仮面は、上流階級の人々によって愛され、宝物として扱われた(工芸品としても)非常に優れた作品ばかりです。その優れた仮面の最上位にある舞楽面陵王を使って行われる舞楽というものの品位、品格というものを改めて認識していただくきっかけになれば幸いです。

ここに発表する仮面年表は、日本の仮面の中核である舞楽面陵王と、その影響を受けて高いレベルからスタートした能面の歴史の概略を年代順に並べて、それに関わった人物や事件等を添えただけのシンプルなものです。

では、年表に記入した各項目の説明をしましょう。

724年の聖武天皇の着位と、729年(天平元年)の光明皇后の名を入れてあるのは、お二人とも初代の舞楽面陵王に関するキーマンであるからです。

735年の遣唐使が唐楽の楽書要録をもたらしたことは、日本の雅楽・舞楽の大きなターニングポイントで、これを機に初代の朝廷型舞楽面陵王が創作されたと見られます。

752年の東大寺大仏開眼供養会は、東大寺で行われたものの、主催者はあくまでも朝廷であり、中でも光明皇后が指揮をして行われたと見られます。

推察の域を出ませんが、このときに仏教行事専用の雅楽・舞楽が新たに編集され、舞楽面陵王も仏教美術との調和を考慮したものが創作されたと見られます。

766年の天平年間の終りの記載は、この天平年間に光明皇后が勢力をふるったことが知られ、又仏教美術の全盛期でもあったという関係によります。

一つの時代の終わりとして記憶する価値があると思います。

794年の平安遷都は、平安時代の幕開けとしてこの後展開される公家、貴族の華やかな舞台を指すものです。

彼らは好んで蘭陵王の舞を覚えて舞ったと言われます。

905年は、醍醐天皇が伊勢神宮に幣を奉じたという記録があって、歴史を調べると904年から旱魃が続き、陰陽寮に命じて五竜祭を行った事に重ねてこの伊勢参りということですから龍神に雨乞いをする最後の手段として龍神と同化して考えられた舞楽面陵王を幣に添えて奉納したと推察されます。伊勢神宮に伝わる舞楽面陵王の鎌倉時代作とされるものが実はこの時に奉納されたものであるという可能性が高く、しかもそれは700年代に雅楽寮で創作された初代の舞楽面陵王であると思われるのです。その後 武家の台頭でまず第一に1146年に平清盛が安芸守に任ぜられたのを機に、朝廷に対抗する如く独自の舞楽面陵王を創作させます。続いて1192年に源頼朝が、鎌倉幕府を開いたのを機に独特な舞楽面陵王を創作させました。

戦乱の時代が終わりに近づいた頃、武家ではなくこんどは商人が台頭して、商人の力による庶

民文化の繁栄をまねき、庶民芸能が盛んとなってやがて能楽が完成します。

その能楽の大夫や能面師を寵愛した豊臣秀吉は、能面の雪・月・花の小面を宝物のように大切にします。秀吉は舞楽面陵王を創作しておらず、あれ程の人物がという気もしますが、雅楽・舞楽を宮中に関するものとして、自分は一步引いていたとも見られるわけで一種の美学をもっていたのかも知れません。一方徳川家康は、1603年江戸幕府を開くと武家の乱立を完全に押さえつけ、平穏な時代へ戻りたいという自信からでしょうか、またしても王朝文化への復歸の形で新しい舞楽面陵王を創作させたのです。その一方では、能面の全盛期は江戸時代一杯続き、おかげで舞楽面陵王までもが能面師の手で作られたという事情もあります。そのことによる問題は、能面師が確立した能面製作技術は水彩画の延長上であったということです。能楽が標榜する幽玄の美学は、現実の世界のきらびやかさとは対照的に、ツヤ消しの奥ゆかしさを柱としているため能面の表側に漆が使われることはありません。胡粉と色粉とをニカワという水溶性の決着剤で練り上げたものを使います。それによって徹底したツヤ消しの彩色をしておいて、磨き上げによる、上質にしてわずかな照りを許すというものです。従って能面製作技術をそのまま適用した仮面は水分や汗に弱く、製作者の技能が高くない場合は、短期間での塗膜の剥離という損傷が発生します。特に舞楽面陵王では、木地を全面的に漆で固めて研ぎ上げた上に、漆箔を施すことが基本となっていますから、その上に接着できる彩色は、同じ漆を使った色漆以外には無いということです。舞楽面陵王に対し、能面師が無造作に胡粉彩色をしたものは失格といえます。

[3] 舞楽面陵王の分類を説明しましょう

3-1 舞楽面陵王には明瞭な分類があります

日本化面研究所で、初めて舞楽面陵王の分類を発表し、その分類ごとに特徴の違いが明瞭に存在することを紹介してきましたが、この講座で改めて詳しい説明を加えたいと思います。

まず、雅楽・舞楽の蘭陵王の起源が一つであったなら、いろいろな陵王面が存在するのは変な話ですが、実は初期の朝廷の都合によって当初から2種類でスタートしたのです。そしてその後の時代に於いて、日本の国家権力の頂点に近づいた武将や実権を掌握した武将達が独自の主張にもとづいて独特の陵王面を創作したことによって三種類が増えました。

朝廷が創作した陵王面の一種類は、耐用年数を設定していたわけでもないようですが、古くなれば写し継ぎの形で新面を作って使うようにし、旧面の方は天皇が保管し何か事があるとゆかりの神社に奉納するということを繰り返してきたようです。

というわけで朝廷が創作した式楽用の陵王面は、朝廷型舞楽面陵王呼びますが、これには初代のものから現代のものまで四面が現存しまして、現役で宮内庁式部職楽部で使用されているもの以外は、全て神社に奉納されて今に至るということになります。

そして武将達が創作した陵王面は夫々の武将が拠点とした神社又は深い縁のあった神社に奉納されて今に至っています。陵王面といわれてきた歴史遺品は他にも59面程あることになっていますが、中にはすでに消滅したり間違いであったりして必ずしも残りが59面とは言えませんが、それら全てがここに明記した五種類のいずれかに当てはまります。

その理由は、朝廷や武将達が創作したものを遠目に見たり、見た人の話を聞いたり、想像したりして何となくそれらしいものやみくもに素人が作ったものということで、決してしっかりし

た創作がおこなわれたものは他には無いということです。

分類名は次の五種類です。

- 1、朝廷型 舞楽面陵王----- 朝廷が式楽用に創作したものを核として それをまねたものを含みます。(写真 1,2)



写真 1、神宮徴古館の陵王面 正面



写真 2、神宮徴古館の陵王面 側面

- 2、藤原型舞楽面陵王----- 朝廷が大仏開眼供養会専用に創作したものを核として、その複製品やまねたものを含みます。
- 3、平家型舞楽面陵王 ----- 平清盛が創作したものを核として、それをまねたものを含みます。
- 4、源氏型舞楽面陵王 ----- 源頼朝が創作したものを核として、その教本となったものや写し、まねたものを含みます。
- 5、徳川型舞楽面陵王 ----- 徳川家康が創作したものを核として、その写しやまねたものを含みます。

3-2 舞楽面陵王の分類別特徴を説明しましょう。

1、朝廷型舞楽面陵王の特徴は

まず、面本体はオールバックの髪を両脇に垂れ下げて下でふくらみを持たせてから後方へもっていく形として、耳の下半分がのぞいて見える、その少し下で下あごを終わりとし、下あご先を分割した形で吊りあごを配置しているのが第1の特徴。

ほぼ骨あたりの盛り上がりが左右とも 2 コずつあり、その山がつらなって眼球を下からかかえた形で大きく前方へ出っ張っていることが第 2 の特徴。

顔面のシワの形が額に三段に横ジワで、中央が大きく盛り上がっていることが第 3 の特徴。(写真 3)

下まぶたから鼻わきにかけて、ほぼ骨あたりの盛り上がりの谷間をぬう形で深いシワが(左右とも 2 本ずつ)つらなり、鼻わきではその上方に更に三本の小じわが並ぶことが第 4 の特徴。

頭上の龍が姿勢を低く構えて周囲ににらみをきかす様子の飛龍で、肩翼と脚翼とを上げてガッシリと面本体にまたがり、面本体と一体化しているように見えることが第 5 の特徴。(写真 4)



写真 3、神宮徴古館の陵王面アップ
目下のシワ



写真 4、神宮徴古館の陵王面
アップで龍

龍頭頂に 1 本の角があり、その元から前後に二又に分かれているのが第 6 の特徴。

龍が上半身と両脚との 3 つのブロックに分かれていることが第 7 の特徴。

龍の口の中、即ち口腔が後頭部へ貫通していることが第 8 の特徴。(写真 5)



写真 5、神宮徴古館の陵王面
アップ 竜の背抜き

龍体の背側を深くえぐり去っていることが第9の特徴。

面本体の眼球が前方から見てほぼ丸く半球状に出っ張った前面に、銀金具が貼り付けてあることが第10の特徴。

面本体の眼球が背後で左右一体につながり、左右を貫通する穴がほぼ中央を通りこれに軸を通して面本体の目のワキの穴へ通すことで、この軸を中心に視線を上下に動かすことができるようにしてあるのが第11の特徴。

面本体の顎は、おわんの底を抜いた形で左右に吊りヒモを取り付けて、そのヒモの先を眼球の後ろの縁の穴に結びつけているのが第12の特徴。

髪飾り様のものが、耳のうしろの面の縁に沿って出っ張っていて把手の役割をもっているのが第13の特徴。

2、 藤原型舞楽面陵王の特徴は、

面本体は面長でほぼ骨は低く、髪は薄くオールバックの引きつめ髪としていてスマートさ鋭さを強調しているのが第1の特徴。(写真6,7,8)

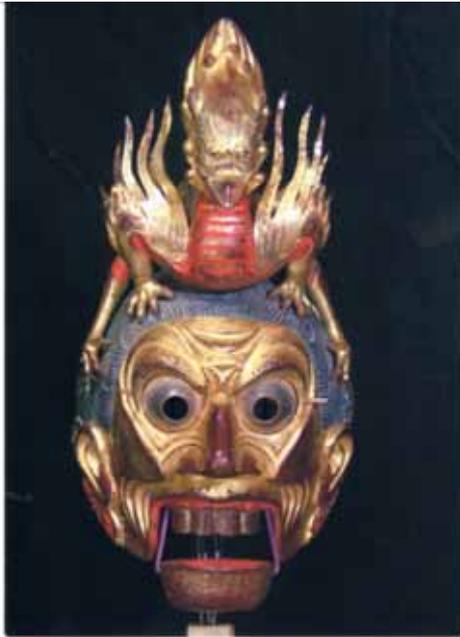


写真6、鉄舟寺の陵王面
正面



写真7、鉄舟寺の陵王面
側面

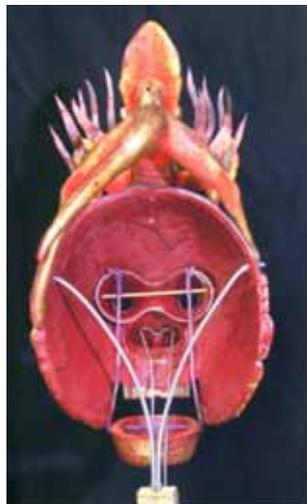


写真8、鉄舟寺の陵王面
背面

引きつめ髪のせいで耳が露出しているのが第 2 の特徴。

顔面のシワの形状は、額では朝廷型とほぼ同じですが、ほほ骨を低くしたせいで、シワも目のしたではシャープな形となっているのが第 3 の特徴。

頭上の龍がヤモリかトカゲに似た全身が載っていて、これは飛龍ではなく翼の無いいわゆる伝説の龍に近い形であることが第 4 の特徴。

龍の首は長くヘビがカマ首を持ち上げた形であることが第 5 の特徴。

龍にはしっかりと尾まであることが第 6 の特徴。

面本体の眼球は丸ではなく ツリ目を表す横長であることが第 7 の特徴。

眼球の後方は朱ではなく金の漆箔であることが第 8 の特徴。

龍体の背側に色漆によるウロコ描きがあることが第 9 の特徴。

髪飾り様のものが高さは低く、頭髪にへばりついた形であることが第 10 の特徴となっています。

3、平家型舞楽面陵王の特徴は、

面本体が朝廷型とほぼ同じであることが第 1 の特徴。(写真 9、10)



写真 9、厳島神社の陵王面 正面



写真 10、厳島神社の陵王面 龍のアップ

龍脚と脚翼とが一体となったものが面本体両脇についているのも朝廷型とほぼ同じであることが第 2 の特徴。

頭上の龍が飛龍ではなく、藤原型の龍の上半身に似たものであることが第 3 の特徴。

龍に申し訳程度の小さな肩翼があって、胸を大きくふくらませてカマ首を高く上げて、非常に高姿勢であることが第 4 の特徴。

龍頭頂に宝塔を載せて神だのみと見えることが第 5 の特徴。

髪飾り様のものが朝廷型の室町時代以降のものとはほぼ同じであることが第 6 の特徴。

4、源氏型舞楽面陵王の特徴は、

面本体の顔面が細い縦長であることが第1の特徴。(写真11、12、13)



写真11、瀬戸神社の陵王面 正面



写真12、瀬戸神社の陵王面 側面

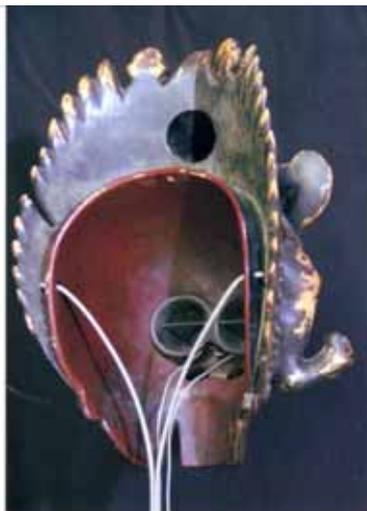


写真13、瀬戸神社の陵王面 斜め背面

頭髮らしいものは無くて顔面に続いて雲形のあいまいな部分があることが第2の特徴。

顔面に続く雲形の後方に羽根状のものがぐるりと上半分に形成されていて、これが仏像の光背に似ていることが第3の特徴。

その羽根状のものが左右とも上下二群に分かれていて上方は前方へ反り、下方は後方へ反っていることが第4の特徴。

面本体の上歯が長く3cm以上もあることが第5の特徴。

額の横ジワは眉間に短いのが2本だけであることが第6の特徴。

ほほ骨は高くなく肉の盛り上がりも少なく、目下のシワが鼻ワキから真横へ走ってのち、ほほ

骨のところから下方へ下がっていることが第 7 の特徴。

頭上に乗っているのは龍とは見えない。異様な動物で足が人間の足に似ていることが第 8 の特徴。

5、徳川型舞楽面陵王の特徴は、

面本体の形状が朝廷型とほぼ同じながら眼球固定であることが第 1 の特徴。(写真 14、15)



写真 14、小茂田浜神社(徳川型) 正面



写真 15、小茂田浜神社(徳川型) 側面

頭髪がオールバックではなく分け髪で、左右に垂れ下げた髪を耳に半分かぶせた所で大きくふくらませ、その先端を後方に向けて終わっていることが第 2 の特徴。

頭髪は緑系、緑青色の胡粉彩色で毛縞の谷間に荘厳を施していることが第 3 の特徴。

頭上に乗る龍の構造は朝廷型と基本的には同じとしながら肩翼を長くして前方へ反らせたり、脚翼を側方へ向けてしかも大きくして外側に反らせるとか、龍頭髪を長く大きくするなど派手に目立った形にしたことが第 4 の特徴。

龍の胴体と腕と脚にウロコを浮彫りにしていることが第 5 の特徴。

吊りアゴにも 4 本の歯があることが第 6 の特徴。

髪飾り様のものを大きくして透かし彫りを施して豪華にしたことが第 7 の特徴。

これらの特徴はいずれもそれぞれの分類の基になった朝廷や名立たる武将が創作したものの特徴を詳しく示すものであって各分類に当てはまるその他の陵王面は必ずしもその全ての項目を持ち合わせているわけではありません。

その理由は、まねをした段階で不確かなところはごまかしたと思われることが多々見られるということです。

また、まねをする段階で複数の型の情報が入り込んでしまった例もありますが、その製作者の好みによるものと思われるいずれかの特徴の強調がみられますから強調された側の分類に含ませ

ることになります。

いずれにしても各分類に当てはまるその他の陵王面は、製作技術レベルが大幅に低いのが特徴となっています。

[4] 形だけまねればいいよ ということではない、という話

この講座で、本物の舞楽面陵王の詳しい情報を沢山の写真で公開しますが、単純に形だけまねれば本物の舞楽面陵王として使えると思ったら大間違いです。まず第1に各分類の中核となっている舞楽面陵王には肖像権が存在すると思って下さい。

明瞭に成文化されたものは未だ存在しないようですが、そういう法律が出来る以前からすでに神格化された形で存在した舞楽面陵王ですからむやみやたらにそのコピーが無許可で作られ、安易に販売されることは禁止ということです。従って形状そのままでなく異なる形を入れ込んだ設計図にもとづくものが作られなければなりません。

次に、形状そのものもしっかりと緻密にごまかしのない工作をして作りあげることが必須条件ですが、それだけでは本物になれません。塗装が非常に重要な要素となっていて、現在雅楽団体が使っているようなペンキ塗りのようなものは下品で、とても本物の舞楽面陵王とは言えません。

塗装の前に必ず彫り上がった木地をていねいに研いでから漆又はカシュー漆で木地固めを行います。そして研いでは塗り、研いでは塗りを10回程繰り返します。この作業は手抜きをすると本物でなくなると思って下さい。

そして漆箔を頭髪部以外の表側の全体に施します。もちろん龍についても同じです。漆箔に欠陥が無いことを確かめたら漆彩色に着手します。頭髪部は透明漆に色粉を調合して色を濃紺としたものを練り合わせ、更に胡粉、砥粉を混合してツヤ消ベースを作って塗り、漆が固化するまぎわに色粉や砥粉の混合物をふりかけて表面に付着させることによって完全なツヤ消彩色とします。

次に龍の翼やウロコや蛇腹の彩色を行います。

この彩色は、やはり透明漆に各色粉を練り合わせて色漆を作りますが、この場合は詳細な絵描きですから練り合わせただけの色漆を直接塗っては失敗となります。美しい線が引けないということです。美しい線を引くためには、練り合わせた色漆を漉し紙で丁寧に漉したものを面相筆につけて行います。

塗りがりの面の処理が重要で、その処理の方法は次の二通りです。一つ目は、色漆が固化する直前に同じ色粉や胡粉や砥粉を適宜使い分けて表面にふりかけてタンポ塗りの要領で塗膜に付着させて粉によるほど良いツヤ制御を行う方法です。

二つ目は、色漆が完全に固化してから1000以上の耐水サンドペーパーを使って水研ぎして乾燥後、空拭きによってしっとりとした質感を出す方法です。

面裏については、黒漆又はうるめ漆で木地固めた上に、黒漆を塗っては研ぎ、塗っては研ぎを5回程繰り返します。そして800程度の耐水サンドペーパーで水研ぎしてから洗いざらしの木綿布で空拭きして、拭きこみによるほど良いシットリ感を出して完了とします。場合によっては着用したときの反射防止にツヤ消黒漆を一層だけ塗ることもありますが、好みによる選択事項でしょう。機能的には着用時間が長い場合汗の流れおち対策としてツヤ消塗装が有効とも思われます。

[5] 後編

この後編では次の事柄についてお話しします。

陵王面といわれる歴史遺品の品質でみたランキング 舞楽面陵王として必要な品位と品質 初代の舞楽面陵王を手本として学ぶ

まずランキングですが、製作技術を尺度として評価しています。それぞれの製作技術を見ずかして、どの程度であるかを判断していますから、公平で正しい評価となっています。

従来は、本物の舞楽面陵王というものの自体が特定されていませんでしたから、一部の人間の主観的判断だけで、いいの、悪いのといわれてきたようで、そのことが世の中に粗悪な新面をはびこらせるもとになっていたと思われまので、これを機に本物の舞楽面陵王というものを明確に認識していただいて、本物とは言えない粗悪な新面は使用しないようにしてもらいたいと思います。

舞楽面陵王の製作技術の解析をもとにした本物の舞楽面陵王の製作技術の確立は本邦初のことです。今後、雅楽・舞楽という文化が続く限りは、舞楽面陵王の製作技術は継承されなければなりませんから、その為の基本教科書として活用してもらいたいと思います。

ここに示すランキング1位のもので、本物の舞楽面陵王と判断できるもので、ランクが下がる程 欠点を多く含むようになります。従って、やみくもにランク 2 以下のものをそのまま、まねたのでは、その欠点まで取り込んでしまいます。

調査によれば過去千年以上もの間、本当の製作技術と云うものの伝承は全くなかったことが分かっています。ひょっとすると“ たかがお面ぐらい、どうでも作れる ” という甘い考えがあって本物の舞楽面陵王の品質の高さに気づけなかったのでしょうか。幸いに 1300 年前に朝廷によって創作された初代の朝廷型舞楽面陵王が現存することが分かり、詳しくその製作技術を解析したところ、多分皆様の想像も及ばないくらいの高度な技術、技能を注いでつくられていて非常に高価な造りとなっていることが判明しました。

これを祖として、その後の時代に数多くの陵王面がつくられたにも関わらず、写しや模造の段階でガクンと品位、品質のレベルが低下したことが見られます。高名な仏師や能面師が作ったものでも重大な製作ミスをしていますから、それより上位の技術を持った者でないと本物の舞楽面陵王はできなかったということを証明しています。では、どういう人物の手で作られたのかといっても全く記録がありません。天平後期に朝廷が創作した初代の朝廷型舞楽面陵王は、明らかに国運をかけるくらいの考えのもとに天皇の為に製作されたはずですから、そこに作者の名前は全く記録される状況ではなかったのでしょうか。

しかし作者は不明でも現物がありましたから本物の舞楽面陵王としてミスの無い完璧なまでの製作技術とその取組姿勢とを現物から読み取ることで正しい製作技術を継承できると確信しています。

当研究所では、初代の朝廷型舞楽面陵王を詳しく技術解析して、適用された技術や技能を解明し、それをもとに本物の舞楽面陵王であるための評価基準を導き出しました。評価基準といっても数値化は無理な分野ですから技術力をもとにした官能検査の形態となります。

評価基準は以下の通りです。

- (1)形状は写実的であるか。
- (2)彫刻技術は優れているか、そしてごまかしが無いか。
- (3)各細工が緻密に行われているか。
- (4)木地処理をしっかりと行っているか。
- (5)塗りは漆をしっかりと重ねているか。
- (6)金箔を漆で付ける漆箔としているか。
- (7)彩色は色漆を使用しているか。
- (8)彩色のツヤ制御処理を施しているか。

[5]-1 陵王面といわれる歴史遺品の品質でみたランキング

評価基準にもとづいて陵王面といわれる歴史遺品の64面の全てについてランク付けしました。そのうちランク1から、ランク4までを表にしましたのでご紹介します。

まず、ランク1に入るものは

一つ目は、神宮徴古館の朝廷型舞楽面陵王の初代のもの。(写真16)



写真16、神宮徴古館の陵王面
斜視

二つ目は、春日大社の朝廷型舞楽面陵王の室町時代の写し面
三つ目は、鉄舟寺の藤原型舞楽面陵王の初代のもの。(写真 17)

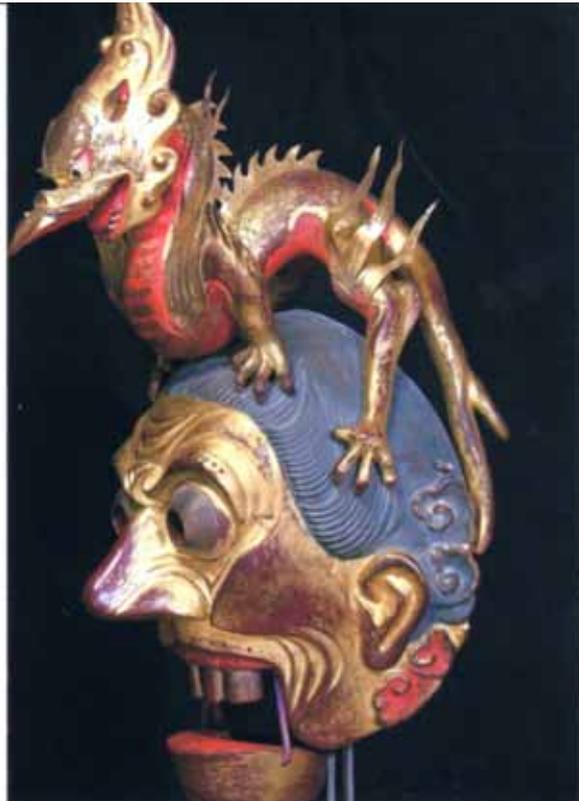


写真 17、鉄舟寺の陵王面
斜視

次に、ランク 2 に入るものは

一つ目は、宮内庁式部職楽部で使用中の朝廷型舞楽面陵王の江戸時代後期と思われる写し面。
二つ目は、住吉大社の朝廷型舞楽面陵王の江戸時代中期の写し面。(写真 18)



写真 18、住吉大社の陵王面
斜視

三つ目は、東大寺の藤原型舞楽面陵王の復刻品。(写真 19)



写真 19、東大寺の陵王面
斜視

四つ目は、巖島神社の平家型舞楽面陵王の初代のもの。

五つ目は、瀬戸神社の源氏型舞楽面陵王の初代のもの。(写真 20)



写真 20、瀬戸神社の陵王面
斜視

六つ目は、春日大社の徳川型舞楽面陵王の初代のものと写し面。

以上の7面になります。

次に、ランク 3 に入るものは

一つ目は、東京国立博物館の(もと天野社所蔵の)朝廷型舞楽面陵王の模造品。

二つ目は、日光輪王寺の朝廷型舞楽面陵王の創作品で、製作技術レベルは高いものの形状をサンプルにしすぎて、重厚さに欠けるのでランク 3。

三つ目は、熱田神宮の平家型舞楽面陵王の模造品で形状のあちこちにごまかしがあるため、ランク 3。

四つ目は、鶴岡八幡の源氏型舞楽面陵王の写し面ながら初代のものよりゴテゴテと形を気張りすぎて品位を下げたのでランク 3。

五つ目は、観世音寺の源氏型舞楽面陵王の見本となったものながら復刻品であって、形状にあまりまいなところが見られるので、ランク 3。

以上の 5 面です。

次に、ランク 4 に入るものは、

一つ目は、法隆寺に所蔵される朝廷型舞楽面陵王の創作品ながら、形状の簡略化が目立ったり彩色が異様なため、ランク 4。

二つ目は、真清田神社の所蔵品で、平家型舞楽面陵王をまねたものですが、工作が雑なのでランク 4。

三つ目は、菅田八幡の所蔵品で、朝廷型舞楽面陵王をまねたものですが、形がかなり違って、工作も雑なので、ランク 4。

四つ目は、宇佐神宮の所蔵品で、平家型舞楽面陵王をまねたものですが、形状の単純化が進みすぎて、ランク 4。

五つ目は、四天王寺の所蔵品で、平家型と源氏型を合成した形の創作品ですが、製作技術のレベルが低く、形状のごまかしが多いので、ランク 4。

六つ目は、氷室神社の所蔵品で、源氏型舞楽面陵王の模造品ですが、工作が雑であるためランク 4。

以上の 6 面です。

表記の中の模造品とは、元本の形をよくまねてはいるものの、工作の技術のレベルが低いものを示します。

写しとは、元本を全く同じに再現する目的で作られたもので、基本的には、元本をわきに置いて、よく見ながら寸法、形状、雰囲気までも同一にする努力を行なった作品を示しますが、但し、その作家の技量が低い場合は、必ずしも同じには出来ず、かなりのズレコミが発生します。

創作品とは、とりあえずその分類には入れるものの、部分的に他の形を取り込んでいるものを指します。

ランク 1 のものについては、詳しく説明しましょう。

ランク 1 のものは、3 面しかありませんが、中でも神宮徴古館と鉄舟寺のものは、他のものよりかなり上位の上質ということで、これらは今後本物の舞楽面陵王の製作技術を継承していく上で大変優れた教本となるものです。

同じランク 1 には入れましたが、春日大社の室町時代作のものは、先の神宮徴古館の初代のものの室町時代での写し面ということで、途中どういう経緯でこの写し面になったかは不明ですが、すでに写実性がかなり薄れ、色々な部分に工作をしやすくする簡略化が進んでいるので、これそのものを模範とすることは控えたほうが良いと思います。

さて、神宮徴古館の舞楽面陵王が飛び抜けて上質であることを具体的に説明しておきましょう。

まず(1)面を構成する色々な部分を大きく見せる形状演出に優れています。その効果で、実際の寸法は大きくないのに大きく、えらそうに見えます。具体的な部分で説明しましょう。

顔面のシワをより目立つ形にしています。このシワは、後世の写し面も基本的には同じなのですが、よく見比べると神宮の方が正面から見たときに横への広がりを感じさせる線になっていて大きく見えるのです。又眼球を、直径をわずかに大きくして前方への出張り量を減らして、目の周りの骨格との差を少なくしたことで目を大きく見せて面そのものの存在感を高くしています。

そして鼻穴を下方ではなく前方へ向けることで大きな鼻を演出し、鼻息の荒い険しさをリアルに表していると言えます。龍の翼は力強い鋭さを強調するように羽先を細くして立ち上げると同時に後方へ反らせることで動きを感じさせるリアル感を出しています。

これらはいずれもパーツを大きく見せる効果があるのですが、それなら大きく作ればいいのかというと、とんでもない間違いです。単純に大きく作った場合は、舞い姿が頭でっかちのアンバランスになりますので禁止です。

次に(2)番目に、写実性が高いことが大きな特徴です。

空想の動物である飛龍をリアルな生き物として感じさせるように身体のパーツを实在の動物に似せることで写実化しています。

(3)番目に、彫刻の技術レベルが非常に高く、難しい曲線を生き生きとしかも緻密に形成していて、その形状のすみずみにごまかしがありません。

(4)番目に、彫刻面の処理が緻密に行なわれていて上質で平滑な面になっています。

(5)漆工芸の技法が徹底して適用されているので耐久性、耐候性に優れた作品となっています。

その技法の一つとして漆の塗膜の油っぽいギラツキを制御する処理というのは舞楽面陵王に不可欠なものです。

(6)龍の背抜きを深くして、軽量化をすると共に、漆箔を施して色漆で絵柄をのせて背面から見ても美しいものとして仕上げています。

(7)番目に、眉毛の植毛に獣毛の毛先の部分だけを使うことで上質なリアル感を出しています。

(8)番目に、目と歯にはていねいな打ち出し加工をした銀金具がかぶせてあります。

(9)番目に、仮面の横からの視線にも、美しく見えるように大きな脚翼を、後方に反らしたり髪飾り様のものもわずかながら後方へ傾けて設置してあります。この横からの視線にも配慮するという事は、この初代のものに限られ、後世の写し面ではみな正面へのアピールだけとなっています。

以上のように神宮徴古館の朝廷型舞楽面陵王は、数多くの点で他の陵王面よりもかなりレベルの高い優れた技術が適用されていますから、これこそがまさしく本物の舞楽面陵王のお手本ということです。

もう一面、鉄舟寺の藤原型舞楽面陵王の初代のものがまた神宮のものにひけをとらない程、上質につくられていますので、具体的にどういふことなのかを説明しておきましょう。

まず(1)番目に、大胆な表情を示す面本体の構造が眼窩を鼻のワキでは普通に前方において、目じりではぐっと後方に引いた形にすることでほほ骨の高さを低くして仮面としての余肉を減らす工夫をしていて、それによって面の表情をつり目の強烈な印象としています。この構造の考え方は、舞人の顔面との密着性をよくして視界の良い軽くて使い易い舞楽面陵王にするということのようです。

この面の考え方のもう一つの特徴は、横からの視線にも見ごたえある形を見せようということのようで、面本体側面の髪飾り様の雲形模様は高さのないレリーフ状の彫りものが、薄い頭髪の上にへばりついている形となっています。そのせいで前からはほとんど見えませんが、横からはよく見えるというシャレた造りになっています。そしていかにも横からすばらしくみえるのが龍です。面本体の頭上にまたがっている龍の腰から後ろの尻や尾を、面本体の縁よりも後方へ出っ張らせてまで立派な龍の全身像を見せています。

この構造はわざとそうしたという感じで、他の陵王面では全くそういう配慮はありません。この構造の理由は、遠くからでも龍が明らかにわかるようにしたということでしょう。

(2)番目に、鉄舟寺の舞楽面陵王も写実性が高く、面全体も龍も、超がつくほどリアルでありながら、主張の強烈な造型としています。

特に面本体が人間の骨格に近い形でありながら強烈な表情を作りこんでいることと、龍が実在する動物の如く克明に作れていることは絶賛に値します。もう一つ龍には気になることがあります。それはムクムクした子犬のような龍頭や腕や身体までもが妙にかわいらしさを感じさせることです。先程の龍の全身像を遠目にもはっきりと分かるようにするのは逆に、近くで手もとでじっくり見ても魅力を感じさせる配慮と言えます。この造型は、仏教美術との調和を考えて、和の感じを入れたと読み取るべきでしょう。

(3)番目に、鉄舟寺の舞楽面陵王も、神宮のものに負けない程の彫刻技術のさえを示し、龍頭髪の巻毛を形成したり、龍の手足の爪先まで写実的な細工を施していますし、面本体頭髪の毛縞彫りも溝が浅いわりには非常に美しく目立ちます。これは彫刻が手馴れた優れた作家によることを意味しています。

(4)番目に、彫刻面の処理が緻密に行なわれていることが破損部分から読み取れます。そして又下地を仕上げた段階で一旦完了して隠し銘を入れていることも特徴です。そのせいで上塗り漆が剥落して銘の一部が露出しています。

(5)番目に、漆箔が厚手に施されています。その漆箔の上にも色漆による彩色が美しく残っています。龍体には青系、緑青のウロコ描きが残り、胸部には朱で蛇腹模様のボカシ彩色がしてあります。

(6)番目に、仏教美術との調和をとるように金銅金具の飾りが沢山つけられています。

彫金加工が施され金銅金具を龍体につけているのは上位ランクのものでは、この面だけですから明らかに特殊用途の面であったことを意味しています。

以上の通り、鉄舟寺の藤原型舞楽面陵王の初代のものも非常に緻密な仕事が施されて高品質の舞楽面陵王に仕上がっていますので、その優れた製作技術と取組姿勢はお手本とすべきでしょう。

[6] 舞楽面陵王として必要な品位と品質

舞楽面陵王というものの自体を見る機会の少ない人に、いきなり品位とか品質の話をしてても全く通じないと思いますので、予め初代の朝廷型舞楽面陵王の再現品の写真を見ていただいてそれと皆様が所有しておられる陵王面や見たことのある陵王面との比較をしていただいたらいいかと思ひます。

たとえ素人の方でもその差は気付くものと思ひます。舞楽面陵王は、造型上奇抜なデザインであるため派手に目立てばいいというような誤解が先行していると見られる粗悪品が出回っていて、皆様がそういうものを使用しているように思ひます。そのような粗悪品を使って行なわれている舞楽は、ひとりよがりのブザマな姿を衆目にさらすことになっていすから反省が必要です。真剣に考えてください。格調が高いはずの舞楽でケバケバシイだけのトンチンカンなお面をつけて舞う姿は実に滑稽でみじめなものです。

当研究所では初代の朝廷型舞楽面陵王を始め、上位ランクの9面の忠実な再現品を一堂に並べて展示しています。これらは歴史遺品の現状を忠実に再現していますから古色が濃厚ではありませんが、その古色の迫力ではなしに、その製作技術がどうであったかも詳しく見ることができます。そして古色の付かない新品の新作面も展示していますから古色の迫力に押されるのではなく、新品でもいかに緻密な工作を施して本物の舞楽面陵王が作られているかをまのあたりに見ていただけると思ひます。

では、どこがどうであれば品位品質が高いと言えるのかということについて説明しましょう。本物の舞楽面陵王として最も確かな初代の朝廷型舞楽面陵王から抽出した品位品質の条件というものを以下に示します。

品位・品質の条件

- (1)彫刻物としての造型の力量、デザイン力があること。
- (2)木彫の技能そのもののレベルが高いこと。
- (3)塗装の技能が高いこと。
- (4)塗装の後処理が適正に行なわれていること。

まず(1)の造型の力量とデザイン力については判断が難しいと言えませんが、基本的には歴史遺品のランク1、2のものから大きく外れた形を取り込まないことが条件です。いわゆる「古典」を継承するのですから、その古典から外れた要素を取り込んでしまうことは禁止なわけです。そして重要なことは、その形状を表現する個々の部分にいっさいのごまかしや手抜きが無いことが必須条件です。ランクの低いものはかなり異様な形のもが含まれるので、うかつにそういうものを取り込んでしまったものは下品で低品質となります。そして、もちろんのことですが、部分的にもごまかしや手抜きが見られるものは低品質であって使用することはできないものということです。

(2)の木彫の技能そのもののレベルは、難しい形状でも逃げずに、きっちりと彫り上げたものが高レベルで上質ということです。これは結局写実性に通じることで、写實的に作るが大変なも

のだから、それを逃げて簡素な形にしてしまうわけで、写実から逃げる取組み姿勢が作品の品位を下げるのが明らかなわけです。このように上質と上品とは表裏一体のものと言えます。木彫の技能の一部に、ていねいな木地研ぎをしないとしないとの差があります。一部の木彫マニアには木地を研がないことを主張する者が居ますが、用途によっては研がないこともありますから研ぎたくなければ勝手にどうぞと言いたいところですが、舞楽面陵王では木地研ぎが不可欠です。木地を研がずに塗装をかけて漆箔の面までもがゴツゴツしたものを平気で舞楽面陵王として使っている例を見たことがあります。実にみすぼらしく、いかにも素人の手作りの間に合わせ品の感じで舞楽面陵王とは認められない物でした。木地を研がずに済まそうなど、とんでもない怠け者の仕事です。

(3) 塗装の技能については、塗り重ねと研ぎを繰り返すことによる薄い塗膜の積層によって上質な表面に仕上げる取組姿勢の有無であって積層数が多い程上質な質感がかもし出されます。

(この積層の考え方は、胡粉塗膜についても同じで、能面製作で行われる胡粉下地から仕上げ、彩色に至るまで丁寧に薄い膜を数多く重ねた程、上質な仕上がりとなり、水生塗料にもかかわらず耐水耐候性も増すという利点があります。)

塗装の質を具体的に見ると塗面が平らであるべきところはあくまでも平らであって、段差のあるところは、その隅の部分に液だまりなどの無いくっきりとしたものが上質ということです。

塗装の技能は舞楽面陵王では明らかに漆工芸の技能を身につけていることが必要条件です。下地から漆箔まで全て漆(又はカシュー漆)で行なうことが必要です。ずっと先のことは分かりませんが現在までは漆(又はカシュー漆)の特有の質感が本物の舞楽面陵王を演出してくれていることは確かです。他の塗料ではこの質感が出ません。他の塗料ではどうしても安物感がついて回ってダメです。

更に大切な塗装の技能があります。それは本物の舞楽面陵王として仕上げる為のツヤ消しとツヤ制御の技能です。初代の朝廷型舞楽面陵王と初代の藤原型舞楽面陵王の塗装を詳しく分析すると色漆の彩色の表面が長年月による風化とは違ったツヤの制御処理が明らかに認められます。これは漆の塗膜が油っぽいキラツキを示すことが舞楽面としてふさわしく無いという考えがあって為された処理とみられ、総称してツヤ制御処理と呼びますが、このツヤ制御処理を巧妙に施すことが本物の舞楽面陵王として仕上げる必須条件であると思います。このツヤ制御処理は適用部分によってその程度を変えていて頭髪部は完全なツヤ消し、唇やまぶた、翼の朱では研ぎ出しによるツヤ制御でシトリ感を出しています。尚、このツヤ制御処理は、天平から平安時代にかけての舞楽面全般に適用されたと見られ、朱系色だけを使われた舞楽面の還城楽や抜頭、地久などではあきらかに研ぎ出しによるシトリ感をもって仕上げとしていたことが認められます。決して塗りっぱなしの漆面ではありません。現代に於いて作られたものは塗りっぱなしのキラキラしたものばかりで非常に下品をさらけ出しているから改める必要があるでしょう。

ツヤ制御の技法はもう一つあります。それは粉かけの技法というもので色漆をもって彩色したのち漆が固まる前に色粉や胡粉、白土、砥粉などを適宜使い分けて求める色合いと風合いを得ながら漆の面のキラツキを抑える方法です。これは非常に微妙な感覚を必要としますから経験を積んでそのタイミングや程度を身に付けることが必要です。

このような品位品質に関して従来の業者は全く心得ていなかったでしょうから改めて学習してもらいたいと思います。

[7] 初代の舞楽面陵王を手本として学ぶ

日本の仮面文化の調査の過程で、初代の朝廷型舞楽面陵王と、初代の藤原型舞楽面陵王の発見がありました。

この二面は、陵王面といわれる歴史遺品の中で群を抜いて優れた作品で、他のものとは異なり手抜きやごまかしが全く無くて、まさに本物の舞楽面陵王というものを知る為の非常に重要な情報を伝えてくれるものです。

これらの製作技術を解析し、再現実験を通して本物の舞楽面陵王を作るための製作技術を再構築するという道が開けました。

これまで日本化面史など、日本の仮面類に関する出版物は色々ありましたが、それらはいずれも仮面の外観をながめて、あれこれ言う記述にとどまり、それらの製作技術にまで踏み込んだものは全くありませんでした。ましてやそれらの仮面を誰が作らせたかということに触れた人は居りませんでした。その背景には仮面というものへの認識が薄く、たかがお面ぐらい簡単に作れるだろうという見下げた部分もあったのでしょう。たしかに仮面は小さくて彫刻としては仕事量が少なくて済むのですが甘く見てはいけません。小さい分だけ緻密に高度な技術や技能がぎっしりと濃密につまっているからこそ価値があって舞楽を支えてきたとも言えますし、その時代の後に誕生した能楽にしても能面という小さな仮面があってこそその文化であると言えます。

小さいと言いながら舞人が顔面に着用するという意味をもう一度しっかり考えてみればいかに重要なものかがわかると思います。

この度、日本の仮面文化の根幹に関わるものが舞楽面陵王であることをつきとめた日本化面文化研究所としては舞楽面陵王の歴史遺品の時系列的な関係もつきとめるべく、それぞれの背景にある事情を調査しました。その結果、伊勢神宮、神宮徴古館所蔵の鎌倉時代作とされるものが天平後期に朝廷によって創作された初代の朝廷型舞楽面陵王であり、鉄舟寺に所蔵されるものが同じく朝廷によって仏教行事専用、やはり天平後期に創作された藤原型舞楽面陵王の初代のものであることを立証することができました。その詳しい説明は後程行いますが、これら二つもの初代の舞楽面陵王が聖武天皇の御代に創作されたことは大きな意味があります。

雅楽・舞楽というものを、アジアの楽を集大成する形で日本の風土にマッチさせ、これら初代の舞楽面陵王をもってその核心としたということではないでしょうか。

これら初代の舞楽面陵王が二面とも非のうちどころが無いくらい完璧なものに仕上げられたのにはそういう意味が込められていたと思われれます。

だからこそ千三百年以上の長年月を越えて現代まで生き続けてくれたといえるような気がしますし、又これら二面が雅楽・舞楽の真の心まで伝えてくれていると思います。

[7]-2 「神宮徴古館と鉄舟寺の舞楽面陵王が初代のものと断定する証拠」

まず発見から断定に至った経緯から説明しましょう。陵王面の全国調査をして、それらに関する歴史的資料や彫刻とか美術とか仏像に関する資料を色々つき合せた結果、第一段階として本物の舞楽面陵王と呼べるものを絞り込みました。次に歴史遺品そのものの製作技術を解析することによって、それらの中に飛び抜けて優れたものが二面あることが分かりました。

そして、その二面の夫々に適用された技術と作風とから、それらの製作年代の絞込みができました。そこで再び歴史事情と照合することによって、初代の朝廷型舞楽面陵王と大仏開眼供養会に使用された初代の藤原型舞楽面陵王とは、まさしくこれらであるという断定をするに至りました。このようにまとめて言ってしまうえば簡単に聞えるかも知れませんが決して簡単なことではありません。12年以上もかかりました。

そこでもう少し詳しく経緯を説明しておきましょう。まず、歴史遺品の陵王面のうち朝廷型舞楽面陵王から大きく形状の異なるものや製作技術が稚拙なものは除外して残るものについて検証をしました。その理由は、初代の舞楽面陵王は朝廷がその威信にかけて目一杯優れたものを作り上げたはずだと推定したからです。ここでは高級品か否かを見抜く眼力が必要となります。次に初代の朝廷型舞楽面陵王が作られた時代を特定する必要があります。というのは時代によって彫刻技術やそれを仕上げる技術に違いがあるため製作されたと思われる時代を特定することが大変重要となるわけです。それで朝廷型舞楽面陵王の初代のものが、いつ作られたかを歴史上の事情から追求することにしました。

まず、日本の雅楽・舞楽のそもそもの始まりは、紀元 701 年(大宝元年)に日本初の官僚制度である大宝律令が制定され翌 2 年から施行された中の式楽専門部署として設置された雅楽寮からであると言えます。この雅楽寮のもとで日本に古くから伝わる楽やアジア大陸からの伝来楽が日本風に練り上げられて数十年の年月をかけて日本の雅楽・舞楽が確立されていったという歴史があります。その雅楽・舞楽のシンボルとなる蘭陵王とその舞楽面である陵王面は確かなところでは紀元 735 年に遣唐使の吉備真備が唐楽の『楽書要録』をもたらしてから正式に組み込まれたと見るべきであることが分かりました。そうすると確かな初代の朝廷型舞楽面陵王は紀元 735 年かその直後に製作に着手されたであろうと見るのが妥当ということになります。

これが非常に重要なポイントとなります。紀元 735 年というのは紀元 729 年に始まった天平時代の初期ですから優れた仏教美術のまっただ中ということです。そうすると初代の朝廷型舞楽面陵王の創作には、その天平彫刻の最も優れた作家があてられたということになります。そしてもう一つ、この時代の仏教美術の大きな特徴に木心乾漆技法がこの天平時代に限定して適用されたという事情があります。木心乾漆技法とは、もとは乾漆技法から発達したのですが、木彫の確かなものをベースとして乾漆の得意なところを組み合わせた技法です。

何故そういうことをしたのかというと、もともと乾漆技法はずつと古くからあって刻苧や穀物の粉(小麦粉)を漆で練って粘土のようにして仏像のコピーを沢山作るために改良された技術です。即ち乾漆技法だけで作られたものはコピーで安物ということになります。それに対し天平時代に入って、そう急いで沢山の仏像を作らなくても良くなり、それより本物の上質の仏像が欲しいということで開発されたのが木心乾漆技法です。

ここで木心乾漆技法に誤解があるといけないので少し説明しておきましょう。言葉の上で草冠のある芯と間違えて木の芯を使った粘土細工をイメージするのは大きな間違いです。木心乾漆のシンは心の方です。この心の字を当てていることに意味があってカンジンなところは確かな木彫技術で作って、それに乾漆の得意なところを重ねて合成して一品物の優れた仏像を作り上げる技法であったということです。この技法は木彫の技術が発達する途中で用いられたもので、その後天平時代を過ぎると工人の技量が向上して木彫で全てのことがまかなえるようになると、そちらの方が上質ということで木彫りだけで仕上げた仏像が主流となります。そういうわけで木心乾漆技法が適用された陵王面の歴史遺品は天平時代の作品であることを証明することになります。

ただ、一度開発された技術ならばその後ならばいつでも使えるではないかという疑問があるはず

ですが、天平時代を過ぎると工人の技量が向上して、木彫だけで優れたものが作れるわけですから、そんな時に木心乾漆技法を適用したのでは時代遅れとして、そしられるでしょう。そういう時代遅れの技術を朝廷型舞楽面陵王に適用するのでしょうか？朝廷型舞楽面陵王の朝廷内で式楽に使うために作られたものは明らかに天皇のためという使命感をもって作られたとみななければなりませんから時代遅れではなく、その時代の最高の技術を適用されたはずです。ですから木心乾漆技法が適用された朝廷型舞楽面陵王は木心乾漆技法が最高とされた時代、即ち天平後期までの作であるということになります。それは初代の朝廷型舞楽面陵王が創作されたと思われる紀元 735 年以降ということに一致してきます。

更にもう一つこの時代の作風を決定づける事があります。それはこれより前の飛鳥時代の仏像では、仏像を異次元のものとして超人間的な様子を形成していたのに対し、この天平時代では仏像がより身近なものとして感じられるように写実主義が取り入れられました。この写実主義が適用されたか否かが彫刻そのものから製作年代を特定する決定的な手がかりとなります。

このように見てきますと歴史遺品の陵王面の中にそれに当てはまるものがあるかどうかということになります。それを判断するにはこれまで現地調査をした現物の解析記録が大きくものをいうことになります。解析記録の中に、ただ一つ該当するものがありました。それは伊勢神宮、神宮徴古館所蔵の鎌倉時代作と言われているものです。

朝廷型舞楽面陵王であって超高級品といえる造りであって木心乾漆技法を適用して入念に写實的に作られているものという条件にぴったりと該当します。木心乾漆技法が適用されていることを見抜いてなければ、この発見は無かったでしょう。裏話を申し上げますと、実は 2000 年 5 月に現地調査をした段階では、事の重大さに気付かなかったのです。神宮徴古館の御好意で現物を詳しく見せていただいて、余りのすばらしさに驚いていたものですから、あ、木心乾漆技法が適用されているんだと軽く受け止めていたのです。ところが、その後の調査で他の陵王面よりずば抜けて上質に作られていることから、その理由を調べる必要があると思った次第です。そこで歴史背景や適用技術の年代による違いも詳しく調べました。そうすると木心乾漆技法と仏像美術との関連から天平時代に限定した技術であったという特殊性が明らかになったのです。そうすると神宮徴古館の舞楽面陵王は天平時代の作品であって朝廷型舞楽面陵王の初代のものである可能性が出てくるわけです。その確証を得るためにさんざん調べました。神宮徴古館に問い合わせても一切分かりません。その理由は、幕末から明治初期にかけて国の政策によって伊勢神宮などが大幅に縮小されたという事情によります。その時に舞楽面陵王も一度失われ、後に買い戻したという事情は余り明らかにしたくない事でしょう。そのへんの細かい事情はあえて詮索すべきことではないと思いますので、この先も不明のままと思われるから、本当のことを語ってくれるはずの現物に聞くことにしました。現物に聞くというのは、現物の製作技術を解析して製作年代を絞り込むということで、幸いにして朝廷の品という特殊性や、たまたま天平時代に創作されたという歴史事情が明瞭な要因であったために絞込み易かったということが言えます。

その結果として、初代の舞楽面陵王に該当するのですが、もう一段疑うならば、これが後世の作家による巧妙な偽造品ではないかということです。そこで、改めて現物の解析結果を見直しましたが、決して偽造品ではないことを確信することができました。確信の根拠は、後世のどの作品も、これよりもはるかにレベルが低いということで、これ程のものを造れる作家が存在しないということです。そして、これ程までに上質な舞楽面陵王を偽造品として作って伊勢神宮の所蔵品とする意味が存在しないということです。更に明治以来の彫刻家や能面作家等の作歴を調べましたが当該時代に於いても偽造品としてこれ程までに上質な舞楽面陵王を作り得た者は皆無です。

従って偽造品の可能性は全くありません。

一方 伊勢神宮に所蔵された理由を調べました。朝廷と伊勢神宮との接点のうち紀元 700 年以降の接点において何らかの理由があってこの舞楽面陵王が奉納されたであろうと思うのです。調査で見つけたのはただ一回の接点です。それは平安時代中期の延喜 5 年(905 年)に醍醐天皇が早魃のため伊勢大神宮に幣を奉じたと「日本記録」に記されているということが早稲田大学演劇博物館の編集した日本演劇史年表に明記されていました。この早魃というキーワードから考えて、天皇がわざわざ幣だけを奉納に行くわけがない。きっと早魃解消の祈願を龍神に願ったであろうという連想で陵王面と龍神信仰との密接な関係から考えて早魃解消の祈願ということで宝物として宮中に所蔵していた初代の朝廷型舞楽面陵王を幣に添えて奉納したと推察する次第です。そういうことならば、これ程までに優れた朝廷型舞楽面陵王が伊勢神宮に存在する理由が明確になるからです。この初代の朝廷型舞楽面陵王は天平時代の創作から約 150 年を経て伊勢神宮に奉納されたということになります。

もう一つ、神宮徴古館でこの舞楽面陵王を鎌倉時代作としている件について説明する必要があります。この面が鎌倉時代作と間違えるのは彫刻技術が卓越なところから生じる間違いです。多分いいかげんな鑑定人が鎌倉時代の作と言ったのでしょう。それはとんでもない知識不足の話で、いくら彫刻技術が優れていてもこれは鎌倉時代の作風ではないのです。時代によって明らかな作風の差があって鎌倉時代の作風はまるやかさを表に出すという特徴があるのですが、この作品は決してまるやかではありません。むしろ鋭さを表に出して写実性が高いということは鎌倉仏師の作風とは大きく異なっています。これは明らかに天平時代の仏師の作風を顕著に表した作品であることを意味しています。丁度いい比較例があります。----- 瀬戸神社に所蔵される源氏型舞楽面陵王の初代のものは、まさしく鎌倉仏師による作品であることは明らかで、しかも巨匠の運慶の作と見られるのですが、これは確かに彫刻技術が優れてはいるのですがその手慣れたノミさばきはこれ見よとばかりに曲線美に満ち溢れていて、まるやかでやさしい仏像と似た感じがします。決して鋭さを表に出していません。こうして二面を比較すると神宮徴古館の舞楽面陵王を鎌倉時代の作品とするのは間違いであることがはっきりとします。

以上が神宮徴古館の舞楽面陵王を初代の朝廷型舞楽面陵王であると断定するに至った経緯と証拠ですが、次に鉄舟寺所蔵の陵王面が初代の藤原型舞楽面陵王であると断定するに至った経緯と証拠について説明します。

まず藤原型とした名称の説明から行ないます。紀元 701 年の大宝律令の選定をしたり、自分の娘を聖武天皇のお姫(光明皇后)にしたりと朝廷内で実権を振るった藤原不比等の藤原の名にちなんで藤原型舞楽面陵王としたのです。この藤原型舞楽面陵王の初代のものは紀元 743(天平 15 年)に聖武天皇の発願で大仏の鑄造が開始されて、紀元 752 年(天平勝宝 4 年)に完成し、大仏開眼供養会という大祭典を行なうに当たり、この大仏開眼供養会専用創作されたと思われるものです。この大祭典のわずか 4 年後には聖武天皇が死亡し、光明皇后が聖武上皇の遺品を東大寺などに収納したということですから、光明皇后と東大寺との関係が深いことを意味しているため紀元 752 年の大仏開眼供養会を光明皇后が取り仕切ったと推察する次第です。それで大仏開眼供養会で行なわれる雅楽・舞楽についても光明皇后が仏教行事用に新たな手を加えさせて専用のものに仕立てさせたと思うのです。

結果として当然のことのように大仏開眼供養会専用の舞楽面陵王が創作されたのでしょう。そう思うに至った理由は、東大寺に現存する舞楽面陵王に基本形状を全く同じくする鉄舟寺の舞楽面陵王の発見があります。1999 年 4 月 8 日に詳しく見せていただきました。それは東大寺のもの

と同様の面本体の顔と上に載った龍が全身であって尾までであることが共通でありながら、東大寺のものよりはるかに上質な造りをしているのです。そして更に大きな特徴として仏具仕立てをしているので、これこそが大仏開眼供養会の為に創作されたものだと思ったのです。非常に高品質な造りであることは初代の朝廷型舞楽面陵王に匹敵しています。そして他のものより群を抜いて上質である上に、仏具仕立ての金銅金具が沢山取り付けられているという超高級品仕様であることが大仏開眼供養会という大祭典にいかにもふさわしいと思われます。仏具仕立てにした理由は、雅楽・舞楽が宮廷の式楽であるため宮廷外の仏門では使えないという考えがあつてのことでしょう。それでも仏教を国策に活用するという一種の国事行為であるため格調の高い式楽が必要ということで仏教行事用に改編した雅楽・舞楽を新たに編成したと思われ、それに合わせて舞楽面陵王も専用のものが新調されたと思われます。その舞楽面陵王のコンセプトは、仏教美術との調和と尊厳であつたと見られ、つまり仏教美術の仏像との調和ということで仏具仕立てという技法を入れたと解釈されます。すでに朝廷型舞楽面陵王があるのに藤原型で形そのものを異なるものにした理由は、その仏具仕立てを連想させるものが伝来した唐楽の資料の中に存在したのであらうと思われます。そして面本体の上に乗る龍がオーソドックスな龍の全身像であることは伝来情報のそのままという感があります。

こうして検証してきますと鉄舟寺の舞楽面陵王が藤原型舞楽面陵王の初代のものとして奈良東大寺で使用されながら、東大寺からは遠く離れた静岡県の鉄舟寺に現存するというので、やはり千数百年という長年月の間には色々な苦難があつたことを物語っています。

一方東大寺に現存する舞楽面陵王が、その復刻品であるということは、次の説明で納得されると思ひます。まず第一に、東大寺の舞楽面陵王は、古様は示しているものの各部に造型上の不備があつて作品としての完成度が低いためオリジナル作品ではないことを意味しています。正元元年銘ということですから、この年の創作とすれば宗尊親王の命令で作られたことになりますが、親王はまだ18歳でしたから執権の北条長時が命じて作らせたのであらうでしょう。しかし、この年に格別に舞楽面陵王を創作する程の大きなまつりごとがあつたわけでもないですし、また天皇の命令として行なうことですから創作品ならば造型上の不備は決して許されないはずで、それに対し、昔東大寺に存在したけれども、その当時は無いというものの復刻であつた場合は、復刻だから仕方が無いということでの多少の造型上の不備は許されたであらうと見るわけです。また復刻でもいいから陵王面を作らうという事情を調べると正元元年と云うのは元年だけで終つてしまう年号の元年ということですが、諸国飢饉で疫病が流行したことが歴史年表に見られますから朝廷内でもかなりのあせりがあつて飢饉を解消したいということで、雨水を龍神様に祈願することになつたと見られます。龍神祈願といへば陵王面という対応がすでについていた時代と思われますから、東大寺に昔あつたと伝えられる陵王面を約500年ぶりに何らかの情報をもとに復刻したものだと思われます。この復刻は雨水を司る龍神に通じる陵王面であれば良かったわけですから仏具仕立てのことなど全く眼中に無かつたということでしょう。

[8]まとめ

雅楽・舞楽関係者(プロ)向けということで、難しい説明を、やや駆け足でしましたので、話し足りないことが沢山あります。

もっと詳しく聞きたい方も居られるかと思しますのでお申し出ください。
熱意のあまり少々きつい言葉を使ったところもありますが、大切な、上質な文化を本気で継承してもらいたいという私の心を理解していただきたいものと思います。

第一線で活動しておられる方々と出来るだけ多くお会いしてお話をしたいと思っています。

ただ私は坐骨が不自由なものですから、遠出が出来ませんので皆様のご都合のつくかぎり、当研究所まで足を運んでいただき、私の集めた情報や貴重な歴史遺品の沢山の再現品を目の当たりご覧いただきながらお話ができれば幸と思っています。

日本仮面文化研究所

所長 梁取弘美

千葉県いすみ市山田 5264-2

電話 0470-66-2466

[9] 舞楽面陵王の歴史遺品のランキング

ランク 種別	1	2	3	4
朝廷型 陵王面	伊勢神宮 神宮徴古館所蔵の鎌倉時代作とされる陵王面 春日大社の室町時代の陵王面	宮内庁式部職楽部で使用中の陵王面 住吉大社の江戸時代作の陵王面	東博の陵王面 (もと天野社) 日光輪王寺所蔵の陵王面(重文)	法隆寺所蔵の陵王面(重文) 誉田基八幡の陵王面(重文)
藤原型 陵王面	鉄舟寺所蔵の陵王面	東大寺所蔵の陵王面(重文)		
平家型 陵王面		厳島神社所蔵の陵王面(重文)	熱田神宮所蔵の陵王面(重文)	真清田神社の陵王面(重文) 宇佐神宮の陵王面 四天王寺の陵王面(重文)
源氏型 陵王面		瀬戸神社所蔵の陵王面(重文)	鶴岡八幡宮の陵王面(重文) 観世音寺の陵王面(重文)	氷室神社の陵王面(重文)
徳川型 陵王面		春日大社所蔵の江戸時代作の陵王面(二面)		

[10] 日本の仮面文化年表

西暦	年号	事項
554		百済から舞楽伝来 天皇へ-----相前後して伎楽も伝来
701	大宝元年	大宝律令により雅楽寮が作られた (朝廷)---文武天皇
724	神亀 3 年	聖武天皇が 24 歳で着位
729	天平元年	藤原光明子が光明皇后となる
735	天平 7 年	唐楽の蘭陵王が遣唐使のもたらした楽書要録にもとづき正式に日本の雅楽・舞楽に組み込まれた。-----朝廷----- この頃朝廷の式楽用陵王面の初代のものが創作された。
752	天平勝宝 4 年	東大寺大仏開眼供養会 ---主催は朝廷---光明皇后----- この頃大仏開眼供養会専用の陵王面が創作された
766	天平神護 2 年	-----天平年間の終り
794	延暦 13 年	-----平安遷都
905	延喜 5 年	醍醐天皇、飢饉を苦慮して伊勢神宮に幣を奉じた。 このとき朝廷の式楽用陵王面の初代のものが奉納された。
1146	元養 2 年	平清盛、安芸守に任命され---厳島神社に平家型陵王面創作
1192	建久 3 年	源頼朝、鎌倉幕府を開き鶴岡八幡に源氏型陵王面創作
1291	正応 4 年	平泉中尊寺に若女面が出現(能面の初期)
1371	建徳 2 年 (応安 4 年)	観阿弥、勧進猿楽を興行(能楽が形を整え始めた)
1399	応永 8 年	世阿弥 醍醐寺で猿楽を行なう
1585	天正 13 年	秀吉関白となる。---秀吉は能楽を庇護し、能面師石川龍右衛門作の雪、月、花の小面を寵愛。月の小面を弟子の家康に贈ったが江戸城の火災で月の小面は焼失。
1603	慶長 8 年	徳川家康、江戸に幕府を開き江戸城紅葉山に徳川型陵王面を創作。 この陵王面は後に春日大社に奉納された。